

氏名	安 允 淑
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	学 術
学位授与番号	博甲第1726号
学位授与の日付	平成10年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	『源氏物語』における外来文物の文芸的研究
論文審査委員	教授 工藤 進思郎 教授 下河部 行輝 教授 辻 星児 教授 渡邊 護

学位論文内容の要旨

本論文は、『源氏物語』に描かれた外来文物を取り上げ、その扱い方を考察することによって、それらの文物が物語世界に投入されたことの意味を、作品論および作者の創作精神との関わりにおいて追究したもので、全五章にわたる本論と序および結語から成っている。

序

『源氏物語』はその時代設定を延喜・天暦期に置くとされているが、それは先進国たる「唐」より積極的に文化を摂取享受した時代から、次第に日本独自の美意識が培われ成長していった時代に当たる。このような文化圏から生まれた『源氏物語』の世界において、外来文物がどのように扱われているか、その実態を探るとともに、それらの文物が作品世界に内在することの意味を究明しようとするところに本論文の目的がある。方法としては、物語の本文に記されている「唐の」「唐土の」「高麗の」といった言葉を手がかりとして出発し、有形の諸文物はもとより音楽や漢詩文をも考察の対象にすることによって、これらの「もの」が物語の構成や主題、さらには作者の創作精神にどのように関わっているかについて論述していきたい。

第一章 『源氏物語』の高麗

渤海との交流史を踏まえつつ、まず「高麗」の語の用例から物語に現れる外来文物の様相を把握するとともに、桐壺巻に予言者として「高麗人」を登場させたのは歴史性と事実性の付与にその意図があったとする。「高麗紙」「高麗錦」等のような身の持ち物・衣装・調度類は、豪華さを彩る象徴として描かれるのみならず、さらに人物造型や場面設定においては、外来物の属性を表す小道具として持ち出されている。特に「高麗楽・唐楽」に関しては、単に音楽・饗宴の描写にとどまらず、左右楽の理念に基づいて人物間の対立感を浮き彫りにする手段として描かれており、『宇津保物語』における「高麗」が、外来物の豪華さ・珍しさは表現し得ているものの、物語の構成に関わって対立感を描くまでには至っていないのは、描写の質において『源氏物語』と大きく異なるものと言わねばならない。

第二章 『源氏物語』の唐物—人物造型とのかかわり—

光源氏をはじめとする登場人物の外来物の使用傾向を、作者の人物造型意識の観点から

考察した。まず光源氏について言えば、その栄華の進展とともに唐物の頻度が増していき、その衰えにあわせて消えていく。唐物の権威ある華やかさが、栄華の推移に伴って消長して行くのである。なお光源氏は外来物も大和物も正当に評価できる人物として描写されている。末摘花に関わる唐物は豪華でもなく、経済力の豊かさを示すものでもない。変質した唐物として提示されていて、光源氏との接点もそこにあるように思われる。欠けた身分的劣性を唐物の権威によって補填することで自負を持ち続ける明石の御方、生得の皇女として唐物に飾り立てられた女三の宮、生涯にわたって唐物を身に付けることのなかった紫の上、それぞれの間像が唐物の使用傾向からも見事に描き分けられていることが知られる。

第三章 外来音楽と『源氏物語』

まず外来音楽である「高麗楽・唐楽」の象る左右楽の対照的表現様式が物語に取り入れられている事実を、宴遊の記述を軸にして考察する。作者は左楽・右楽の楽器・調子・曲目のそれぞれに、対立的な関係にある人物を配置したり、物事の優劣を象徴する技法で外来楽を記しており、さらに日本固有の音楽とも対照的に描き出している。外来楽器である琴の琴は皇族の表徴として設定され、光源氏と運命を共にする楽器として関わり続ける。それゆえ須磨流謫の折にも「琴一つ」を持参させるのであって、これには歴史的事実や漢詩文との繋がりを確認することができる。

第四章 『源氏物語』の漢詩文

漢詩文の受容態度と内在様態について考察した。桐壺巻の「長恨歌」の引用に関しては先学の論述も多いが、本論では桐壺巻における「長恨歌」の内在様態を、「長恨歌」にはない要素、つまり若宮誕生と藤壺の登場をもって、新たな「長恨歌」的世界が始まるものと見た。「李夫人」の引用が集中している宇治十帖における漢詩文の受容態度には、物語に「契り」を持ち出すためのものとして、「鑿鑿感也」の諷諭性が強く感じられ、わけても物語の結末部に描かれた浮舟の拒絶は、惑う男に対する女からの決断という点で、紫式部の新しい諷諭をそこに見る思いがする。また漢詩文の引用に際して、「人の朝廷の例」という表現で、『史記』をはじめ漢籍中のエピソードを持ち込む態度も確認でき、作者の漢籍による外来物との接触が読み取れるのである。

第五章 『源氏物語』における外来物と大和物

物語中にしばしば見受けられる「唐の…、大和の…」という対句的表現や、春秋論における唐土と大和、さらには「漢才」と「大和魂」の関係などについて考察した。作者は外来物を大和物と対照的なものとして捉えながらも、日本人の情緒に合う大和物を見つけ出してからは、ついに外来物と融和していく姿勢をとっている。例えば、外来楽を「ことごとし」とするのに対して、東遊・催馬楽を「なつかし」と評したり、漢詩文を作るのに適した季節としては春、和歌を詠むのに適した季節としては秋といった具合に、両者は競い合うものとして捉えられていた。それが外来音楽の呂旋には春を、日本的な旋法である律旋には秋を当てはめて、それぞれの季節に適合した音楽や詩作を分別する姿勢へと変わり、ついには「をりにあふ」ものなら外来物も大和物もすばらしいとする融和の精神へと帰着する。「大和魂」も「漢才」を基にしているからこそ本来の機能が発揮できるとする処世論からも、「外来物」と「大和物」との融和を尊ぶ精神がうかがえるのである。

結語

各章における論述について摘記するとともに、本論文全体をとおして得られた外来文物の扱い方について、その種々相を列挙しながら、概ね次のようにまとめている。

- 1 『源氏物語』には外来文物を積極的に物語の世界に投入していく作者の姿勢が確認される。

- 2) しかし、ただ単に外来文物を投入するだけではなく、これらを大和の文物と並列ないし対照させることによって、いわば対句的な二元的構造をなしていることが確認できる。
- 3) 外来文物を大和の文物と対照的なものとして捉えながらも、ついにはその融和を尊ぶ精神がうかがわれる。

唐風と国風の両文化が混在し、また国風文化への傾斜が顕著になっていく時代の文化圏から生まれた『源氏物語』の世界において、外来文物は物語を織りなす文化的産物として、また大和の文物を引き立てるものとして、さらには融和する文化の産物として描かれており、作者の創作精神がここにも色濃く反映されているのである。

論文審査結果の要旨

審査委員会は、国文学分野から2名、国語学分野および言語学(朝鮮語学)分野から各1名の委員で構成し、審査に当たった。本論文を詳細かつ慎重に審査した結果、審査委員が評価できるとした主要な点は以下のとおりである。

- 1) 『源氏物語』に関する研究には長い歴史があり、近年は国内のみならず海外における研究にも見るべきものが少なくない。一口に「文芸的研究」と言っても、人物論、成立・構想論、構造論、主題論、表現論等、種々の立場からの研究が積み上げられてきた。本論文はこれらの方法に学びつつも、『源氏物語』に見られる外来文物を精査して、綿密かつ丹念な考察を加え、それらの文物が物語世界に投入されたことの意味を精力的に追究したもので、有形の諸文物はもとより音楽や漢詩文をも含め、これだけ多くの外来文物を取り上げた総合的研究は前例を見ない。本論文によって『源氏物語』の中に占める外来文物の位置付けが、従来よりも遙かに明確になった意義は大きい。
- 2) 『源氏物語』に見られる文物の研究は、主に文化史や風俗史等の面から行われることが多かったのに対して、本論文はもっぱら外来文物に焦点を絞り、それらの文物が人物造型や物語の構成・主題とも関わり合っていることを指摘したところには独創性が認められる。
- 3) 第一章において、筆者の母国である渤海との交流史を踏まえた考察が見受けられるのは、国文学研究においては未開拓の分野に属し、ユニークな視点の導入として注目される。
- 4) 本論文は400字詰にして約580枚余に及ぶものであるが、全体にわたって外国人離れした日本語の正確さは、本論全五章にそれぞれ各三節を配置した用意周到な目次の立て方とも相まって、側面から本論文の価値を引き立てている。

一方、審査を通じて指摘された問題点もあったのは言うまでもない。内容に関わる主な点を挙げてみると、まず物語中の外来文物を精査した努力は多ししなければならないが、全体的に絵花的な印象を与え、論述が表面的に流れたり、やや粗い部分も見受けられることや、本人も巻末に述べているように「外来文物」ないし「外来物」の選定にあたって見落としたものも少なくない。動植物・宗教・制度のほか、漢語についても和語との対比の面からの考察を無視することはできないであろう。また第五章で取り上げた「春秋論」に関しては、古代における中国や日本の詩文に見られる先蹤との関連を考へてみる必要があるが、これは第五章の漢詩文についての考察が手薄だったことと併せて、今後この方面の研究を深めていくことが緊要と思われる。

審査委員会は、以上の事柄を総合的に判断し、本論文を博士の学位論文として認定することについて全員一致で合意した。